

Title	ドイツの岡先生
Author(s)	根本, 英世
Citation	西洋古典論集 (2001), 別冊: 107-110
Issue Date	2001-01-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/68704">http://hdl.handle.net/2433/68704</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## ドイツの岡先生

根本英世

ミチオ・オカをご存知か、とフランクフルトの Patzer 教授から尋ねられ、私の先生です、と答えたのは、留学第2ゼメスターが始まって間もなくのことであつた。岡先生が京都大学文学部紀要に『ホメロスと叙事詩の環』<sup>(1)</sup>を發表されたことが、教授の耳に入っており、興味をもたれていたよし。さらに、自分は日本語が読めないで、今日の授業で簡単に内容を話してもらえないか、と依頼される始末。簡単に、など語れるはずもないのだが、うろ覚えの内容構成をごく大雑把に、つたないドイツ語で汗をかきかき10分ほどかかって説明し終えたが、実際は適当な表現が思い浮かばず、うなっている時間のほうが長かつたのではないか。ともかく、非常に包括的な研究ですね、から始まる教授の賞賛の言葉に救われた思いがし、またそれ以上に誇りを感じたものである。

岡先生のドイツでの留学・研究は、私の知る限り、ベルリンが東西に分断された留学時代を皮切りに、都合五度に及ぶ。その地は、第一回目の前半はテュービンゲン、後半および二度目以降は、いずれもマインツである。三度目（1977～1978年）は、奥さまと当時小学生のお嬢さま二人を伴ってのご滞在であつた。この時期はたまたま私自身のフランクフルト留学期間の前半と重なつたので、しばしば隣町マインツのお宅に深夜までお邪魔し、翌日に及ぶこともあつた。当時フランクフルトほどの都市でも日本人留学生は10人余り、総領事館もディスカウントチケットもインターネットもないため、日本の情報はほとんど入らず、中にはホームシックに罹り帰国してしまった学生もいたらしい。私が2年間をなんとか過せたのも、岡先生のさまざまなご教示とご家族の暖かいおもてなしに負うものと、深く感謝している。当時を思い出しつつ、ドイツでの先生の一端をみなさまにご紹介したい。

三度目のドイツ滞在中はヘーゲル・シュトラッセにお住まいであつたが、奥さまたちがいらっしゃるまでの約一ヶ月間、大学のゲストハウスで独身生活に戻られていた。ここを訪ねたおり、柄から棒状コイルが出ている妙な電気器具が目に入り、お尋ねすると、「湯沸しです」。水を注いだ容器にこれを入れ、電気を通すとコイル部分が熱せられ、短時間で湯が沸く仕掛けである。

Tauchsiederと呼ばれる一種の電熱器であるが、「必要量をすぐ暖められるし、留学生時代がなつかしくて」。当時すでにこの実物を知らないドイツ人学生もいるほど、フランクフルトの学生寮では誰もが電気ポットやコーヒーメーカーを使っており、この器具は「歴史的」なものになっていたのだろう。実際ベルリンの壁が築かれたのは先生の最初のドイツ滞在期のことで、「第三次大戦が始まるのではないか」というほどに緊張していた当時のドイツ社会の雰囲気、フランクフルトの同僚たち以上に詳しく教えてくださった。また「ぼくの留学時代にはあの辺りは瓦礫のままで」と、マインツの町並みを歩きつつ当時を語ってくださった先生の言葉のほうが、出発前に目を通した現代ドイツ史関係の書物より、はるかに現実感を帯び、教えられるところが多かった。

この時期私は“Sieとduの用法”について困惑を覚えていた。教室で習った規則、小説などの会話シーンなどによれば、一定の年齢以上の間では親族・親友でない限り、Sieを用いるのが普通のはずである。ところが現実には学生たちは初対面でも全員duで呼び合うではないか。親愛の情を当初から示すためと推測はできても、どこかに納得できない部分が残る——以前は学生同士でもSieであったのに、なぜduへと変化したのか、それはいつ頃のことなのか。岡先生の場合、例えば親友Beck氏とはduで呼び合っていたが、Nikolai教授を紹介してくださった際、両先生はSieで語り合っている。教授とも学生時代からの付き合いのはずなのにと、その後失礼を顧みずわけをお尋ねすると、「ぼくの場合は普通Sieでしたが、最近変わっているようですね。調べてみますか」。

岡先生の「調べてみますか」は、「調べると面白いですよ」の謂いだから、さまざまな年齢層の知り合いに尋ねてみた。外国人学生の、素朴なこの疑問に対して、どなたも好意的に各自の経験と見解を語ってくださったが、その結果のみ記せば、以下のようなになる。学生間でも初対面もしくは親友というほどではない間柄では、1)戦前はSieが普通だったが、2)のちdu現象が出て、3)戦後復員学生が多くなり学生同士の年齢差が大きくなるとSieが優勢になった。その後4)duと5)Sieの時期が一度ずつあったが、いずれも短く、6)60年代後半からの反権威・反権力的な大学紛争を背景にduが絶対的優勢になり、当時(77年)まで続いている<sup>(2)</sup>。これらの交替は、duがやや安易に使用されすぎる、あるいは周囲がSieばかりで息苦しい、と人々が感じたときに生じるのではないか、しかし今回(上記6))の現象はずっと続くかもしれない、と言う人もいる。またある程度の年齢以後に親しくなった場合には、Sieのままであ

ることが多い。例えば大学卒業後に職場で知り合い、親しい間柄が幾十年が続いても、Sieのままのことがある。また私がよく出入りしていた家庭の主婦は、絶対的な“Sie主義者”で、duは小学校・ギムナジウム時代の、戦前からの友人数人のみに対して使用し、自分の子供の幼い頃からの友人たちにもSieで通している。以上のことを次にお目にかかったおりに申し上げますと、先生の最初の留学期は上記5)に重なっていたらしいとのことであった。またフランクフルト古典学科の助手があることをきっかけに、以後duで呼び合おうと私に提案してくれたが、そのことを申し上げますと、そのようなきっかけが大切、とのこと意見であった。

先生が日常ドイツ語の変容にも関心を払われていたことは、さらに、ヘーゲル・シュトラッセのお宅でテレビニュースを見ていたときのことでも、わかる。アナウンサーの言葉“Wir schalten um nach München”(ミュンヘンに切り替えます)<sup>(3)</sup>に一瞬先生のほうを振り向くと、微笑みながらメモを示された。そこには、先生がテレビを見ていて気づかれた、この類の例がいくつか書かれているではないか。古典に関する先生の学識を私などが語るのもおこがましいが、ドイツ語、あるいは言葉全般に対する真摯な態度を、まさに目の当たりにしたわけである。その晩は、なぜこのような現象が出てきたか、について歓談したが、現実揺れ動く語法のことだから、結論めいたものは無論出るはずもない。しかしドイツ語についても、テキスト化されたものだけでなく、方言をはじめ、音声にいたるまで、幅広い関心をもたれていることが、よく理解できた。

別の機会のこと、「親子丼」をどう訳すべきか問われた私が、“Mutter-Kind Teller”では、と答えると、では「他人丼」ならば、と先生にしては珍しく矢継ぎ早のご質問。これには考え込んでしまうと、先生曰く「“Stiefmutter-Kind Teller”はどうです、自分では名訳だと思っているんだけど」。そこで、語感から見て日本語の「他人」を“Stiefmutter”とするのはいかなものなのでしょうか、という私の異議を端緒として、その日は「ドイツ語訳」から「アルコール」に至るまで、さまざまなお話を伺うことになった。先生は最初の留学中は自炊をされており、料理用語を知人たちに説明する際、おそらく当時の高踏的な独和・和独辞典は実用に耐えなかったのであろう、ご苦労されたい。私の時代でさえ、“pikante Soße”を「トマトケチャップ」とする辞典があったのである。しかし先生が意外にも、肉の味付け法などに詳

しかったのは、留学時代に会得されたのではないか。

また某先生とイタリアの安ワインを飲みすぎて、翌日大変であったことも、実に楽しそうに語られた。さらに、テュービンゲンは町が小さいため、酔っ払うと翌日日本人社会に知れ渡ってしましてね、といくつかの実例をあげられていた——ただし先生にはこの種の武勇譚はなかったとのこと。また下戸の私が、フランクフルトの同僚に「ドイツを知るために」と称して、頻繁に連れ出されるザクセンハウゼンの飲み屋では、席に着くと初老のドイツ人たちに「日本人か」と話し掛けられ、その仲間との同席を強要される。こう申し上げると、いいじゃないですか、「今度はイタリア人抜きで」が出ませんか、とおっしゃる。先生ご自身、数度の体験があったらしい。しかし私の場合はやや深刻で、彼らは酔った挙句、肩を組んできて「イングランドへ爆撃云々」と軍歌めいたものを歌い出し、帰り際には必ずこちらの分も払っていく。将来ドイツに一大事が生じた際の潜在的な徴兵義務を負わされているようで、と冗談を申し上げると、先生には珍しく哄笑なされた。その晩はこれを発端として、ドイツ人と第二次大戦の問題について、先生のお考えを拝聴することになった。この問題について私なりに関心をもっているが、ドイツ生活の長い先生のご意見には蒙を啓かれる思いもした。のちにそのいくつかを年配の愛国的ドイツ人たちに語った際、一方的に断罪されるばかりなのに、そのように理性的に見てくれれば自分たちも反省すべきものが多々ある、と感謝されたのである。先生がドイツを深く愛していたことは間違いなかったが、それは盲愛ではなかった。

ドイツの岡先生の思い出は、どうしても私自身のドイツ生活と重なる。留学前半期に先生から「ドイツ滞在手ほどき」を受けていなければ、私の中には「偏ったドイツ像」ができてしまったかもしれない。当初は学生寮と大学との往復に終始する生活だったが、これもドイツですからね、と示していただいた『シュテルン』に象徴されるドイツにも、目を向ける余裕ができたのは、先生のおかげと心から感謝している。これを斟酌くださり、以上の妄言をご海容いただきたい。

- (1) 1976年。のち『ホメロスにおける伝統の継承と創造』創文社（1988年）に入る。
- (2) あるドイツ人ゲルマニストは、この現象を説明する際、“Sie-Zeit”、“du-Zeit”と称していた。
- (3) umschaltenは分離動詞だから、分離の前綴りumが文末に来なければならない。